

神奈川支部情報

第13号 発行日 2009年10月31日

<発行者>撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

<連絡先> 松山英司 TEL/FAX 046(871)4263

e-mail kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp

郵便振込口座 00190-2-114578

神奈川支部は10月3日、かながわ県民センターで第7回神奈川証言集会を開催しました。今回も70名の参加者を得て、盛大に開催できました。

今回は第1部で高橋哲郎さんに、「一発の弾も撃たなかった元兵士の戦犯の体験」と題して証言をしていただきました。第2部では明治学院大学専任講師の張宏波さんに講演をお願いしました。張宏波さんは、「戦犯管理所の元職員は日本をどう見ているのか?」と題して、この夏に戦犯管理所を訪れて元職員の方々と話し合ってきたことの報告を中心に、これからの日中双方での歴史の継承について提起をしていただきました。

これまで中帰連の方々の証言は、そのすべてが、と云っていいほど中国での侵略戦争の実態としての三光作戦をめぐる体験の話だった。今回の高橋さんの証言に「一発の弾も撃たなかった・・・」と表題を付けたのですが、侵略戦争の実態を立体的に把握することのできる貴重なお話でした。鉄砲だけで侵略戦争はできないのです。

前回、第6回証言集会で姫田先生の講演で「侵略戦争は、ハードとソフトの両面から行われる」ということを「hard war」と「soft war」という言葉で説明されました。高橋さんのお話はそのことを、新たな角度から証明するものでした。

以下、高橋哲郎さんの証言を紹介します。

(張宏波さんの講演については次号「神奈川支部情報」で報告する予定です。)

一発の弾も撃たなかった元兵士の戦犯の体験

<高橋哲郎さん証言>

軍国少年でなくても天皇教に染められた

ただいま紹介をいただきました高橋です。これから私が60年以上も前に経験した、中国侵略のお話と、私が歩んできたやや特殊な体験について、みなさんにお話しします。ここには戦後生まれの人が大勢おられるようですので、戦争を直接知らない皆さん方に私の体験をお話ししまして、皆さんの歴史認識について、特に日本の中国侵略についての戦争の歴史について少しでも認識を深めていただければ幸いです。

私是一个の人間として、私の88年間の歴史はなんだったのだろうか、とい

までも時々考えるのですが、子供の時から振り返ってみますと、平凡で、典型的な日本人であったなあと、そんな感慨をもっています。

1921年、大正10年に私は九州の宮崎県の山深い田舎町に一商家の次男として生まれました。多くの戦争体験者の人たちが「自分は軍国少年だった」と幼いころを振り返っておられますが、私の場合はそれほど典型的な軍国少年ではなかった、と思っています。

しかし当時、大正10年、1921年、更には1931年の満州事変がはじまる頃の日本は厳しい世界恐慌の波に襲われ、対外的に、即ち第1次世界大戦直後から日本が満州侵略の端緒を開くような時期でした。私たちは、小さい時から天皇教の教えのもとに育ちました。今考えれば大変恐ろしいことですが、私たちは生まれた時から家には、天皇、皇后の写真が掲げられて、皇大神宮や伊勢神宮の神棚が祀られていました。また仏壇には先祖が祀られていました。これが一般的な家庭の状況でした。

小学校では教育勅語を聞かされます。「朕思うに皇祖皇宗は・・・」から始まりますが、「朕」とは天皇のことで、教育勅語とは絶対君主である天皇がこのように考えているという恐れおおい「お言葉」なのです。また、修身という教科がありまして、道徳教育がおこなわれていました。そして天皇中心の国家体制を子供のときから、知らず知らずのうちに受け入れてきました。自分は軍国少年だった、ということのことをことさら意識はしませんが、自然の流れの中でそれを身につけていたわけです。

これが明治時代から続く、巧みに組み込まれていた教育の機能であったと思います。天皇は現人神(アラヒガミ)だと教えられていました。すなわち人間の姿をした神様であって、この神様である天皇を中心とした日本、日本の天皇を中心としたアジア、天皇を中心とした世界、これを「八紘一宇」という言葉で表現して、これを世界支配の最高理念としたのです。このように、私は生まれたときから「天皇教」の中にどっぷりと浸かっていたのです。

したがって意識する、しないにかかわらず、その当時の少年はすべて「軍国少年」化しているわけです。天皇教は即軍国主義なのです。世界の情勢なり、日本の情勢なりを意識し始めても、そのような情勢などの情報はけっしてリアルに入ってくるようなことはありません。天皇制の支配する国家体制の発行する新聞、雑誌などが警察や憲兵の検閲のもとに社会に流布されて、それが私たちには親や学校の先生からそそぎこまれて、徹底的に国家体制の中に組み込まれていったのです。

一方では、田舎の山や川原を飛び回って、自由奔放に遊び回っていましたが、また一方では、頭の中は124代の天皇の名前を暗記させられたり、教育勅語を暗記させられたりして天皇教の中に埋没させられていったのです。これが当

時の日本の99%の子供たちの状態でした。

私はかなり素直な子供だったのですが、13歳の頃には幼年学校の試験をむしろ喜んで受けました。子供たちは「末は大臣か、大将か」という、そのような夢を持つことが当たり前でした。軍人になることは大変大きな夢だったのです。あるいは男の子だったらそれが常識のルートだったのです。「陸軍幼年学校」は13歳から受けられます。中学校4年生になると「陸軍士官学校」が受けられます。その上が「陸軍大学」です。このような制度が体制の中に組み込まれていました。

一般の大学と比較しても授業料納入の必要がなく、世の中の尊敬の的になる、このようなコースは貧乏人には最高の選択だったのです。私は何のためらいもなく「陸軍幼年学校」を受ける道を選びました。しかしながら私は小さいときから虚弱児で、残念ながら受験の前の身体検査で失格となりました。「陸軍幼年学校」も「海軍兵学校」もそのために受験ができませんでした。今考えれば、この不合格だったことは幸いだったと思っています。

今の社会のように情報がたくさんある場合と比較すると、単純な情報しかなければその情報に人間の考え方が規定されてしまうのです。1931年、満州事変がはじまったころですが、東海林太郎という歌手がいました。「国境の町」という歌がはやりました。満州国の国境のさみしい情景を情緒たっぷりに歌い上げて、子供心にも大陸にあこがれをもつような歌でした。また、「昭和維新の歌」という歌も流行りました。「泪羅(べキラ)の淵に波騒ぎ、巫山(フザン)の雲は乱れ飛ぶ、混濁の世にわれ立てば、義憤に燃えて血潮わくー」という歌でした。いかにも社会正義に燃える青年将校たちの純粋な心情を歌いあげたものでした。

そして満洲や蒙古を「日本の生命線」と位置づけて、侵略を美化し、正当化していきました。なぜ日本の生命線が海の向こうの、大陸にあるのかなどということは全く考えもしませんでした。

中国大陸へ雄飛する

日本の生命線とはソ連の南進を食い止めるには蒙古との国境線が生命線であって、ここは絶対に守らなければならないとなっていました。そういうことで守りを固めなければならない。そこで、関東軍が自らきっかけを作って満州事変を起こしました。1931年でした。そして満蒙開拓団が送くりこまれ、「満州に雄飛せよ」、「若者は満州へ」と盛んに宣伝されました。

その頃になるとヨーロッパではナチスドイツが政権をとって、独裁的な権力を発揮してヨーロッパで第2次世界大戦の端緒を切り開いていきました。日本でも軍国主義が強化されて、33年には国際連盟を脱退して、満州を植民地に

するような軍国主義的な政治体制が固まっていきます。そのような時期に、私は子供から大人になる時期を過ごしてきました。

私の考え方も自然のうちに中国大陸へ雄飛して、大和民族を中心としたアジアをつくる、ということで大東亜共栄圏という構想が進められ、その思想を知らず知らずのうちにそれが身についてしまっていました。このことがまた、私が大阪外語の中国語学科を選んだ唯一、最大の根拠でした。

私は傑出した、優れた人間であるとは思っていませんでしたし、でもグウタラな人間でもなく、ごく普通のまともな人間だと自分では思っていました。また一面では野心的な面があって中国へ行ったのですが、また反面時代の流れに迎合している自分もありました。

当時、治安維持法がありました。1%くらいの抵抗者はいましたが、99%は時代の流れに迎合していました。小林多喜二とか、抵抗する当時の日本共産党の人たちに対して世の中は「国賊」として闇に葬り去りました。このような感覚が普通でした。そのような中で私は努力して家庭に負担をかけることもなく、奨学金をもらって外語に入りました。大阪外語を卒業して紙の専門商社に就職するわけですが、就職するにあたって中国へ派遣してもらうことを条件に入社しました。

一人の見送りもなく、寂しい召集

1941年（昭和16年）に外語大卒業と同時にその会社に入って、その年の7月には中国山東省の青島に転勤になり、同じ山東省の済南に配置されました。こうして中国で働いているときに徴兵検査がありました。

私は矛盾した気持ですが、一面では兵役は忌避したい、だが満洲蒙古へは雄飛したい、日本のためには尽くしたい、だが兵隊には行きたくないという矛盾した気持ちはありまして、体格のいい人が揃っている地元に戻って徴兵検査を受けました。そのためかどうか知りませんが、「第2乙種合格」ということで現役ではないので、7月から中国へ行ったのです。

1941年7月から44年2月まで、中国人を相手の商社マンとして営業活動をしていました。37年の盧溝橋事件から始まる「日支事変」、その戦争の拡大、拡大で中国大陸だけでも手に負えない状況なのに、さらに41年暮れの日米開戦によって戦線は南方まで拡大されていきました。そして44年には太平洋戦争が完全に敗色濃厚となり、玉砕から玉砕が相次ぎ、サイパンも玉砕していよいよ沖縄本島にまで米軍が上陸する状況になってきました。

そのために、満洲にあった関東軍の精鋭部隊もほとんど南方に送られて、米軍との熾烈な戦争を強いられていました。こうして大陸の対中兵力が手薄にな

ったために、私のような者も引っぱり出されるようになりました。

今までは、外地にいる者には召集がかからないという恩典があったのですが、43年ころからは、戦況がそんなことを言っている状況ではないということでした。第1補充兵であろうと第2補充兵であろうと外地にいる者もすべてが、一網打尽に召集令状が発令されるようになったわけです。会社の済南支店には3人の日本人社員がいましたが、結局最後には全員が召集されてしまいました。その中でも私が一番早く召集されました。

そういう状況で、44年2月に山東省の西にある泰山というところにあった、山東省を隷下にしていた12軍59師団に入隊しました。以上入隊までの状況です。

59師団、54旅団109大隊で初年兵教育が始まりました。初年兵教育の内実は、内地で初年兵教育を受けた人の話を聞いても、野戦でのそれもほとんど変わりはありません。非人道的で、大変暴力的な教育が行われました。これが日本軍隊、すなわち皇軍という天皇の軍隊の最も特徴的な面です。

暴力によってその人が持っている人間性を喪失させることと民族的な優越感、大和民族の優越、他民族への劣等観念とを合体させて、非人間的な鬼畜の教育を行う、これが日本軍隊の教育の根本です。陸軍も海軍もこれは同じです。後に海軍の話も聞きましたが、海軍は同じ船に乗り合わせれば運命共同体な一体感があるはずなのですが、実際は陸軍と変わらず「精神注入棒」で、暴力的な教育が行われました。海軍の海兵隊でも少年兵教育でもどこでも同じことでした。野戦でも、暴力的な制裁が雨あられのように加えられて教育が始まります。

かつての勝ち戦のとき、1937年から38年ころの「万歳!」「万歳!」と叫んでいた南京大虐殺などを行っていたようなあのころは、召集を受けると近所、親戚、村中をあげて幟旗を掲げて「バンザイ!」「バンザイ!」と送り出されました。「名誉の家」という名札が留守宅に掲げられて、留守宅も誇らしげでした。

しかし私の場合は、済南で召集を受けた時は誰も見送ってくれる人はありません。近所の付き合いもなく、会社の先輩が一人だけ入隊に付き添って来てくれて、着替えた洋服や私物を預かってくれました。私は歓呼の声で送られた記憶はありませんし、「出征兵士」という襷もかけたこともなく、一人うつうつと、アンペラを敷いた、中国の民家を改造した兵舎に入隊したのでした。

私の受けた「特別訓練」

初年兵教育は1期、2期それぞれ3か月ずつで6か月かかります。2月に入

って8月までかかるのです。私の場合は109大隊の歩兵砲中隊に入りまして、そこで大変厳しい教育を受けました。私は23歳でしたが一緒に入った補充兵の中には、すでに社会人になって一家を構えている人も現地で召集されてきていました。その人たちは肉体も鈍っていて、砲身を担いだり、砲を引きずったりするような激しい訓練には耐えきれません。歩兵砲中隊には「標悍」(ヒョウカン)と言って、距離を測るときに使用する鉄の棒があります。その鉄の棒で頭をぶんなぐられた人もいました。すると縦一列にこぶができるのです。

補充兵で入隊した30何歳かの料理屋のご主人がそのような目にあい、ぶっ倒れて、即入院してしまいました。このように初年兵教育がはじまりました。私の場合、その点では幸いだったのですが、59師団というのは面白い政策をとるような節目になっていました。そのころは、末期的症状ということでしょうが、召集されてくる兵隊が体力的に大変劣ってきました。しかも肺結核を罹っている人がかなり交じっていました。そこで、ツベルクリン反応が陽転したものは別枠にして、59師団「特別訓練隊」という特殊教育部隊が組織されました。

私もその歩兵中隊での初年兵教育を1カ月くらいで切り上げ、有名な泰山のふもとの泰安という町の特別訓練隊に転属になりました。私たち70名くらいの者が集められて特殊な訓練が始まりました。その特殊な訓練ですが、ツベルクリン反応が無くなるまでそこで初年兵訓練を行う。そこでの訓練は野戦の一般の初年兵訓練と違って、体育訓練、教練、休養などを組み合わせて「やさしい」訓練が行われました。この特別訓練隊に組み入れられたことが、私が命を永らえた一つの原因でありました。そこで3か月から4か経過して身体も元気になるようになりました。並行して行われた一般の野戦部隊での初年兵訓練では、人間性はく奪の鉄拳制裁による本当に馬鹿げた訓練が行われていました。それに比べれば、私たちはたいへんやさしい訓練でした。

これまでこの県民センターで証言を聞いた人たち、金子さんや絵鳩さんや坂倉さんや小山さんたちは、まともに野戦での初年兵教育を受けました。野戦で初年兵教育が終わるとすぐに「教育討伐」が行われます。八路軍を討伐するための実践訓練です。ここで八路軍を捕まえて、と言っても実際には簡単に八路軍が捕まるはずもなく、農民を捕まえてくるのです。その人たちを対象にして、初年兵の刺突訓練を行わせます。このような訓練に遭遇しなかったことも私にとって幸いでした。

実際に59師団の藤田中将が、戦況に伴って初年兵に度胸をつけさせるために必ず「実的刺突」を行わせるように命令したことを後に供述しています。当時、山東省で59師団で初年兵訓練を受けたほとんどの人はそのような刺突訓練を行っています。

私の場合は、幸いなことにそのような「教育討伐」における実体験をすることなく、特別訓練での初年兵教育が終わると不思議なことに師団司令部の参謀部にある宣伝報道班に転属になりました。外語で中国語を学び、現地で4年間の生活が勘案されたのだらうと思います。

宣伝報道班の任務

「麦と兵隊」を書いた火野葦平、「野火」を書いた大岡昌平など、有名な当時の文壇のトップクラスの者は従軍記者として戦地に派遣されています。彼らは国民の戦意を高揚するために「作品として」、従軍記や小説やドキュメントを書いているのです。

司令部の中に設置されていましたが宣伝報道班の私たちの任務は主として、対八路軍宣伝、中国の住民を対象とした宣撫工作、日本軍内部の戦意高揚のための宣伝工作、などでした。

私が転属になったのが1944年の10月でしたが、その時期の戦況と対策が後で参謀本部の折田参謀という人が書いた「北支の治安戦」を読んで、それでよくわかったのです。それまでは宣伝報道班というのは形だけのもので、機能していなかったということでした。実際には八路軍の攻撃を受けてだんだんに後退した日本軍は43年ころからは、「点と線」（都市部と鉄道沿線）だけしか支配できなくなってきたということです。59師団は八路軍との戦闘が一番多かった部隊として有名なのですが、その59師団においても「点と線」しか守りえない状況を打開するために三光作戦（焼き尽くし、奪いつくし、殺しつくす）といわれているように徹底した燼滅作戦を展開したのでした。

しかしこのような作戦だけでは中国の一般住民を手なづけることはできない、日本軍への従順な体制を保つことはできない、ということがわかってきたようです。日本軍も八路軍がやっているような文化工作を駆使して、住民の治安を図らなくてはいけないということになって、特に師団の中で能力のある新聞記者だとか、特殊な工作員だとか、技術者とか、中国語に堪能な人だとか、いう人たちを43年ころから特別に集めて、宣伝報道班を強化するということが参謀本部の命令で行われてきました。そこに私も組み込まれたのだ、ということが後でわかりました。

初年兵が宣伝報道班の中で一つの仕事を与えられるということはそれまではかってなかったのです。みんな古い上等兵や下士官など上官のもとで作戦行動が行われるのですが、私の場合いきなり状況が説明されて一つの工作が指示されました。

京劇団を編成して

その任務ですが、済南に「新華院」という、中国人の捕虜収容所がありました。八路軍や国民党軍の捕虜が収容されていました。1000名以上はいたと思います。その「新華院」の中に慰安のために京劇団がありました。

京劇は日本の歌舞伎に匹敵するもので、中国人に大変好まれるものです。北京の京劇や、広東の越劇だとか、各地に特色のある古典劇があります。その京劇団を再編成、強化して準治安地区で公演して、中国人民の宣撫工作に使い、という命令を受けました。私は私なりに研究して、軍の費用でこの京劇団をそれまでの倍くらいの規模に再編成して、ドラや太鼓や衣装など必要なものを整え、1、2ヶ月後に準治安地区でその地域への住民宣撫の工作を始めました。

準治安地区とは、敵地区（八路軍支配地区）と治安地区（日本軍の支配地区）の間のことので両方からのせめぎ合いの地区でもあります。そのために新華院の劇団を構成して教育して、1945年4月から始まった秀嶺第1号作戦の中に組み込まれていきました。作戦の一部だったのです。

最初は長清という町で公演しました。もともと中国人は京劇が好きなのです。今でもそうです。特に中年以上の方は熱心です。三国志演義の曹操、劉備、孫権や諸葛孔明が参謀として戦った勇ましい場面が取り上げられています。決して政治的な意図を持った内容ではありません。この公演を1回か2回おこなただけでも大変効果があったように私は思っていますが、しかしそうこうしているうちに59師団に関東軍への移動命令が出たためにその2回だけで、この京劇工作は全部終わってしまいました。

三光作戦と表裏の宣撫工作

宣撫工作についてもう少し話します。これは三光作戦の裏側の作戦です。秀麗作戦の中で私が京劇団を率いて宣撫工作をおこなっていたときに、59師団はどのような作戦がおこなわれていたのか。これは後々に戦犯管理所に入って、藤田中将を中心に59師団の者が集まって、討議して自分たちの罪行を暴露して、集計したことがあります。

当時の山東省で被害を受けた中国人からの調書とも照らし合わせながら、調査した結果、平和人民の殺害が100余名、捕虜の殺害が80余名、地雷による爆殺死が60余名、強姦による殺害が60余名というように生々しい犯罪行為がおこなわれていたのです。その裏側で京劇のような宣撫工作がおこなわれたということを後で知りました。したがって、三光作戦という残虐な行為が行われていたこととの、表裏の関係をしっかりと見極めて理解しなければいけな

いと思います。

シベリアから、まただまされて

シベリア時代についても少し話します。1945年8月に私たちは北朝鮮の咸興(カンクウ)で敗戦となるのですが、59師団の兵士は全員シベリアへ送られました。私たちはシベリア生活が一番長かったのです。5年が経過した1950年にハバロフスクに集結させられました。終結した約2000名の中から969名が、「中国を侵略した戦犯として」撫順に送られました。

中国も国民党政府から共産党政府に変わって、新しい中国が成立してまもなくのことでした。当時スターリンと毛沢東、周恩来の間で話し合いがあったようですが、中国の主権で中国を侵略した犯罪者を裁判にかけるということを世界に宣言する、という意味を持って私たちは中国に引き渡されました。1950年7月でした。

ハバロフスクからは「ダモイ」(帰るぞ)と言われて、まただまされて貨車に詰め込まれました。グロテコ、綏芬河(スイフンガ)を經由して撫順に入りました。中ソ国境の駅綏芬河で、7月19日に一人一人点呼をとって、ソ連軍から中国解放軍に引き渡されました。その時点ではまだ「戦犯」ということを理解できません。捕虜の続きという意識でした。しかし中国側では貨車から客車に移されました。

今までは窓もない地獄のような暑い貨車から、客車に移され、座席に座って、みんな何ごとかと困惑していました。しかし背伸びができ、呼吸ができるし、解放軍の兵士たちから、看護婦さんやお医者さんまで車内を回ってきて、非常に親切に「病気の人はいませんか」と聞いてくれました。白い饅頭、スープ、ソーセージなどを配ってくれました。シベリアでは生死をさまようような労働と貧しい食事の中で苦しんできたみんなですので、キョトンとした状況で、まだこれからの深刻な状況判断ができずにいました。

こうして同月21日に撫順に入るわけですが、戦犯管理所に着くと一人ひとり部屋に入れられました。一部屋に15、6人入ると鉄の扉が閉められて、ガチャンと鍵がかけられました。窓側も廊下側も窓には鉄格子が入っていました。壁の内側には「戦犯管理所」という張り紙が貼ってありました。ここで初めてどうも様子が違う、ということにみんなが気づきはじめるわけです。私の場合には先程の話のように、中国に対するある程度の知識を持っていましたのでそれほど驚きませんでした。ほとんどの者は満洲、「中支」、「北支」などで中国人をいやというほど痛めつけてきているわけで、中国に連れてこられたというだけでも戦々恐々としていたことは否定できないでしょう。ですから、「戦犯」と

という言葉に強烈に、過敏に反応したのです。

しかし、管理所側は収容者からの抗議に対して、「戦犯」という文字をあっさり外したのです。後々考えると、管理所の職員はたいへん賢明だなあと思います。そもそも私たちはまな板の上の鯉ですから、どうしようもありません。どんなに反抗しようと、外には逃げられないわけですし、生殺与奪の権を中国側に握られているのです。国際法について私たちは当時は全く知らず、後で勉強したのですが、国際法上、そのような抵抗や反抗は全く問題にならないのです。理屈からいっても、また中国人の感情からいっても「お前たちは戦犯なのだから分かるだろう」ということだったのです。そういうことで張り紙のことでは、抵抗分子の気持ちも治めてきました。しかし私たち自身の疑惑、不満、ヤケクソの自暴自棄、癪に障った抵抗意識、反抗意識、などが渦巻いていました。このような時期を経て、それからが私たちの本当の戦犯管理所における、学習と反省の時間がやってくるのです。

私の思想転変

私自身の思想が転変した決定的なことについてお話します。私にとって中国戦線での1年半の体験では、中国人民を直接殴ったり、蹴飛ばしたり、殺したり、焼いたり、奪ったりということはありませんでした。したがって私にとって管理所は何だったのか、ということを考えてみますと本当に不思議なことでした。管理所にいた969名のほとんどの者が1953年から中国の公安部、司法部からの調査、取り調べを受けていました。ですが、私は全くそのような調査も取り調べもなかったのです。

というのは、入所した当時全員が経歴書を書かされています。私も生まれたときからの経歴を書きました。平和時から戦争、軍隊での経歴、司令部での経歴などもこまごまと書きました。土屋芳男さんや三尾豊さんや多くの中帰連の人たちが、激しい罪行を胸に秘めながら管理所に入って、管理所の職員たちの丁重な取扱、裏表のない取扱、面と向かって馬鹿にするような言動のない取扱、痛みや苦しみをよくよく聞いてくれるという姿勢、このようなことに接していく過程で、その当時私たちはみんな、管理所の所長以下ほとんど全員が日本軍によるひどい仕打ちを受けていて、自分の身内の者や親せきや、あるいは自分自身が被害を受けた人だということを知りました。このようにたいへんな憎しみを持って日本軍人に対応しているということを知覚していませんでした。情けない話なのですが、そういう知識しか私たちにはなかったのです。

しかし、自分がやったことは自分自身がよく知っています。そのことをよくよく理解するようになって初めて管理所の職員たちに対する自分たちの犯した

罪の深さがいかに深いかということを知覚するようになってくるのです。

残虐行為を直接行わなくても

私自身は過去において、そのような中国人民に対する直接的な行為はなかったが、実際に何百万人という日本軍隊が、中国人からの何の理解もなしに軍靴を履き、ゲートルを巻いて、銃を持って、あるいは大砲を引き、戦車に乗って中国大陸に押し入り、何千万人もの人々を殺してしまった。ということを経験の過程で、友人、同僚の告白の中でだんだん知ることになってきました。

しかし私にとって大事だったのは、学習をたいへんよくさせてくれたということでした。かつて日本の天皇、天皇制、軍国主義、日本の国家体制など、このようなことについて、さらには侵略の軍隊、侵略の軍事行動などなどについて、それまで考えていたこととはまったく違うことが、違う歴史観ということが中国側から提供される資料から学ぶことができました。

中国側からの希望もあり、私たち側からの希望でもあったのですが、たとえばレーニンの「帝国主義論」、あるいは野呂栄太郎の「日本資本主義発達史」とか、井上清の「天皇制の本質」とか、さらに私は全く知らなかったのですが、毛沢東の著作「矛盾論」「実践論」「持久戦を論ず」や、劉少毅の「共産党員の修養を論ず」など、こういうものを読ませてくれました。

それと同時に私たちが入ったところは1950年からの朝鮮戦争が始まりました。中国人民解放軍が義勇軍を組織して、北朝鮮軍と一緒にアメリカと韓国の軍隊と戦っていました。私たちは、日本軍ですら負けたアメリカ軍に、中国軍が勝てるわけがない、と最初は冷めた目で見ていました。

事実を知って

しかし「人民日報」を毎日毎日読ませてもらって、私たちが翻訳してみんなに読んで聞かせたりしましたが、戦況が克明に描かれているのです。それを読んでいるうちにこの書かれていることは嘘ではない、人民解放軍は結構強い、と思いました。そのうちに停戦交渉が始まって、53年に停戦協定ができました。ということで38度線に収まるわけですが、このような現実の状況と、広島、長崎の原爆や、日本国民の大変苦しい生活状況などを日本の「赤旗」や「人民日報」などで学習することができました。

並行して、自分たちの行った罪の認識が具体的に出来上がってくるのです。中国侵略とは一体何だったのかということ、毛沢東の「矛盾論」や「実践論」などの学習に基づく理論と実践の統一こそ大切だということ。理論だけではだ

めだということ、実践だけではだめだということ。この統一の問題を大変よく、わかりやすく教えてくださいました。

「矛盾論」や「実践論」はたいへんわかりやすく、弁証法的なものの見方を説明してくれています。私にとって目から鱗が落ちるような状況でした。それによって私自身はまだまだ幼稚な段階でしたが、日本の侵略軍、天皇制、日本軍隊、日本社会の初歩的な理解ができました。このような学習と、みんなが告白してくれる罪行と中国側の適時適切な指導がすべて重なって私自身の成長が育まれたのでした。

ようやく入口に

私は管理所での生活6年間に2つの成果があったと思っています。ひとつは物理的な成果です。私はもともと虚弱体質でありました。その上シベリアでの栄養失調のせいも重なってたいへん体が弱かったのです。しかし、中国へ来たら3度3度の食事、適度な運動で、しかも豊かな食事なのです。想像もできなかった豊かさです。さらに病気になれば速やかに診てくれる医療制度、などの中で私自身の身体は大変丈夫になりました。これは正直言って感謝です。

もう一つは、私たちの頭の中のことです。私は決して積極的な軍国主義者ではありませんでした。しかし徹底した天皇教の思想をもっていたことは確かです。それで、幾ばくかの抵抗感を持ちながらも、すんなりと軍隊に入り、天皇を信じ、軍隊で命令されることはいやいやでも何でもやりました。

ですから、金子安治さんや、坂倉清さんなどが行ったような残虐な行動が、私もそのような状況に置かれれば、私自身も唯唯諾諾としてやったと思います。しかしそのような思想をこの6年間で一掃できるような考え方が、ようやく実についたなあと思います。ですから私にとって6年間は、思想改造の本当に入口に立ったなあ、と思っています。

このような学習と同時に、私に強い衝撃を与えたのは、あの平張山虐殺事件で生き残った方素栄さんの血の叫び声でした。日本軍により、自分の肉親を目の前で虐殺されていく中国人民の悲しみ、憎しみ、怒りを直に聞かされ、初めて私は被害者の心情の一端を全身で感じることができました。

6年間の管理所での学習の最大の成果は、このような中国人民の心情に一步近づくことができるようになったことだと思います。このように私たちは「撫順は再生の地である」と心に深く刻み込んでいます。